

[社 会]

主体的・対話的で深い学びを実現するための 中学校社会科地理学習指導の工夫

－パフォーマンス課題の設定とジグソー学習を取り入れた「アジア州」の授業－

親松 直樹*

1 はじめに

2021（令和3）年度から中学校においても新学習指導要領が全面実施となった。学習指導要領では、育成すべき資質・能力を「三つの柱」で示している。「知識・技能の習得」、「思考力・判断力・表現力等の育成」、そして、「学びに向かう力・人間性等の涵養」である。この「3つの柱」を育成するために、「何を学ぶか」という内容面と、「どのように学ぶか」といった方法面の両方から工夫・改善していくことが必要となる。

劇的に変化していく社会の中で、この「三つの柱」を育成すること、主体的・対話的で深い学びを実現するためには、これを意識した単元構成を考えることが求められる。そして、単なる知識の網羅に陥らないように学習課題、学習活動を工夫していくことが大切となる。特に、地理的分野の「世界の諸地域」の学習においては、州ごとの細かい知識を網羅的に学習するだけでなく、習得した知識や技能を関連付けながら、地域の特色や地域が抱える課題などについて考え、追究していくことができる授業展開を工夫していく必要がある。その際の手立てとして、授業で習得した知識や技能を用いて自分の考えを表現したり、他者との意見交流を通して考えを練り上げたりする対話的な学習活動を取り入れることは、主体的に課題に取り組もうとする意欲を高めるだろう。この意欲を高めるための活動として、関わり合いを通して一人ひとりが学びを深めることができる知識構成型ジグソー法が適切であると考えた。知識構成型ジグソー法においては、まず、単元での課題を設定する必要がある。生徒がその課題に意欲的に取り組むためには、現実世界の課題と類似した本物らしさを持った課題を設定し、授業で習得した知識や技能を使いこなす力を評価するパフォーマンス課題が適切だと考えた。本研究は、生徒が意欲的に取り組むことができる課題を設定し、その課題の解決のため、グループでの話し合い活動、学級全体での意見交流を通して、州の特色や課題に対しての考えを持つことができるようにしていくことを目指す。

2 研究の仮説

- (1) 生徒が興味をもって取り組むことができる、単元を貫くパフォーマンス課題を設定することで、生徒が意欲的に学習に取り組むことができるだろう。
- (2) 知識構成型ジグソー法を活用し、他者との豊かな意見交流や対話を行うことで、生徒が主体的・対話的に学び、学習課題への考えや理解に深まりが見られるだろう。

3 研究の内容と方法

(1) 研究テーマに迫るための手立て

① 単元を貫く学習課題の工夫

単元の中で習得した知識・技能を生かし、思考・判断・表現することができる適切な課題を設定することで、知識・技能の活用を含めた思考力・判断力・表現力及び、主体的に学習に取り組む態度を評価することができると考えている。そのために、単元を貫く課題として生徒が意欲的に取り組むことができる、具体的な事例を設定したパフォーマンス課題を取り入れる。

② 主体的・対話的な深い学びを実現するための学習活動の工夫

社会科が得意な生徒だけでなく、授業に臨む全ての生徒が意欲的に活動し、自分の考えを伝え合ったり、他人の説明

*長岡市立東北中学校

に耳を傾け自分の考えをさらに深めたりすることができる学習活動を展開する。具体的には、知識構成型ジグソー法を取り入れ、生徒同士の関わり合いを通して一人ひとりが学びを深められるようにしていく。

(2) 研究テーマに関わる評価

- ① 授業後の生徒の自己評価において、次の項目の肯定的評価が80%以上になることを目指す。
 - (ア) 話し合いや学び合いの活動で、自分の考えや集めた情報を仲間に伝えることができたか。
 - (イ) 仲間との意見交流を通して、新たな発見があったり、自分の考えが深まったりしたか。
 - (ウ) グラフやデータなど、諸資料の読み取りが仲間と協力しながらできたか。
- ② 生徒のワークシートへの記述において、本時の授業の前後で、自分の考えに新たな知識や概念などが追加されて強化されたり、既習事項と関連付けて記述したりしているなど、自分の考えに変化が見られたかどうかで判断・評価する。

(3) 本単元の構成と位置付け

- ① 単元名 「世界のさまざまな地域」、「世界の諸地域」1. 「アジア州」より、小単元（第2次）を設定
- ② 単元の目標

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
アジア州について、経済発展とその歴史的背景、各国の結び付き、州で見られる地球的課題などを通して、地域的特色を大観し、理解する。	アジア州の地域的特色や課題について、その要因や影響を州内の各国の結びつきなどに着目して、諸資料から読み取れることと関連付けて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する。	アジア州について設定された主題「経済発展」を通して、そこで見られる人口増加などの様々な地球的課題に着目して考え、主体的に追究しようとする。

③ 単元について

本単元は、学習指導要領地理的分野の内容（1）世界の様々な地域のウ「世界の諸地域」にあたり、各州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる地理的事象を取り上げ、それを基に主題を設け、その追究を通してそれぞれの州の地域的特色を理解させることをねらいとしている。本単元は、大単元「世界の諸地域」のうち、(ア)アジア州を指導内容として構成したものである。

本単元で扱うアジア州は、面積は全陸地の23.9%を占め、その中で世界人口の約60%が集中する地域である。GDPは中国が2030年にはアメリカを抜いて世界1位になると予測され、インドも世界第5位となっており、今後の急成長が期待される地域である。それは中国やインドといった国だけでなく、その他の発展途上国も例外ではない。2010年代にはインドネシアやイラン、パキスタン等の国が目立つようになってきている。豊富な労働力と安価な人件費などを背景に、外国企業が多数進出してきており、工業などの様々な面で大きな発展を遂げ、そのことが人々の暮らしにも変化を生じさせている。その反面、所得格差の拡大や環境問題等のように、経済成長に伴った課題が見られる国もある。産業の発展に伴ってアジア諸国が世界の国々との結びつきを強めていく中で、日本とアジア諸国が協力して様々な問題を解決していくことが今後は求められていくことだろう。

そこで、本単元では、単元を貫く学習課題として「経済発展の進んでいるアジア諸国の中で、日本はどの地域（国）と深く関わっていくべきか」を設定する。第1次では、アジア州の産業発展と人々の生活の関わりなどの追究を通して、アジア州の各国の産業の特徴について理解を深める。そして、第2次において、第1次で得た知識や技能を活用しながら、日本が今後、アジア諸国とどのように関わっていくべきか考察する。日本が属するアジア州の変化について学び、日本とアジア諸国との関わり方について考えることは、社会的事象と地域が抱える課題を自分に直接関わることとして捉えることができ、国際社会に生きる公民としての資質や能力の育成につながると考える。

4 実践事例

(1) 小単元の指導計画（全3時間）

単元を貫く課題	経済発展の進んでいるアジア諸国の中で、日本はどの地域（国）と深く関わっていくべきか。
---------	--

次時	学習項目	学習活動	主な評価規準
第2次 (3)	1 アジア州の各地域の振り返り	アジア州の5つの地域(国)の特徴と、経済発展の様子について調べ、レポートにまとめる。(エキスパート学習)	アジア州の5つの地域(国)について、複数の資料を踏まえて、表現することができる。【思考・判断・表現】
	2 日本が関係を深めるべきアジアの地域(国)とは本時	これから日本がアジアの5つの地域(国)の中で、どの地域(国)と関係を深めていくべきか、前時の調査活動を踏まえて考え、表現する。(ジグソー学習)	日本が関係を深めていくべき地域(国)について、グループで話し合う活動を通して、根拠を明らかにして説明することができる。【思考・判断・表現】
	3 単元のパフォーマンス課題と振り返り	これから日本がアジアの5つの地域(国)の中で、どの地域(国)と関係を深めていくべきかを個人で考え、表現する。	日本が関係を深めていくべき地域(国)について、根拠を明らかにして説明することができる。【思考・判断・表現】

(2) 単元と生徒(1年5組 男子17名 女子17名)

地理的分野の学習では「世界のすがた」、「日本のすがた」、「世界各地の人々の生活と環境」の学習を終え、学習テーマを追究する「世界の諸地域」の単元に入る。事前アンケートでは、78.2% (とても好き:9.4%, 好き:68.7%) が地理的分野の学習において肯定的な自己評価をしている。意欲的で主体的な学習が継続するように、生徒の生活と結び付いた教材や資料を配列して、様々な社会的事象への興味・関心を高める工夫を図る。しかし、地理的分野の学習が嫌いな生徒も2割程度いることから、学習への意欲を高めていくことができるような工夫も図る。

また、事前アンケートの「グラフやデータなどの資料を読み取ることは得意ですか」という問いに対して、資料の読み取りに関しては学級の半数が苦手意識を持っている(図1)。本単元では、資料集、地図帳、タブレットなどを活用しながらアジア州の5つの地域(国)について調査を行い、必要に応じて生徒同士で話し合いをしながら、地域(国)についての理解を深めるエキスパート活動を設定し、他者との関わり合いを通して、全員が資料の活用・読み取りができるよう工夫する。5つの地域(国)については、教科書の構成、並びに教科書で取り上げられている国に準拠して、アジアの5地域からそれぞれ中国・タイ・インド・カザフスタン・サウジアラビアの5ヶ国を指導者の方で選び出した。学級の班は6人班が基本であったため、6人班の場合は東アジアからの国を中国と韓国の2ヶ国とした。そして、調査する地域(国)が重複しないように、話し合いによって生徒に選択させた。

さらに、事前アンケートにおいては「班や全体の前で発表することは得意ですか」という問いに対しても、学級の半数の生徒が苦手意識を持っていることがわかる(図2)。生徒が互いに関わり合いながら社会的事象についての見方や考え方を広げ、深めていくためには、

単元の中に計画的に話し合いや発表の場を設定し、そのスキルを高めていけるような工夫をしていく必要がある。

本単元では、ジグソー活動を設定し、前時のエキスパート学習で調査した内容を班活動の場面で発表・説明ができるようにし、生徒全員が発表・説明ができたという実感を持つことができるようにしていきたい。他のメンバーからそれぞれが調査した地域(国)についての説明を聞き、自分が担当した地域(国)との違いや関連を考える中でさらに理解を深めていく。理解が深まったところで、「アジア諸国の中で、日本はどの地域(国)と深く関わっていくべきか」という学習課題への答えを考える。

その後、どの地域(国)にすべきか根拠も合わせて学級全体で発表し、他の班の意見に耳を傾けるクロストークの時間を設ける。各班から出てくる答えは同じであったとしても、根拠の説明は少しずつ違うと思われるため、各班の答えと根拠を検討し、その違い理解することを通して一人ひとりが自分なりのまとめ方を吟味するチャンスが得られると考える。そして、単元の最後の授業において、今までの学習を振り返って、はじめに示された課題に再び向き合い、最後は一人で課題に対する答えを記述させる。

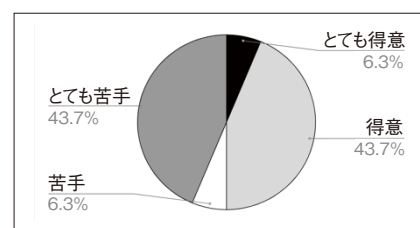


図1

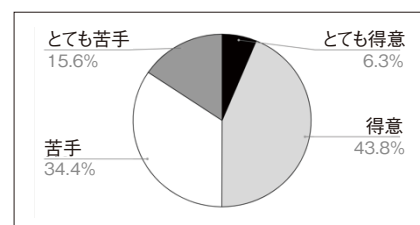


図2

(3) 本時の展開 (2/3時間)

① 本時のねらい

前時の調査をもとに、これから日本が関係を深めていくべき地域(国)について、グループで話し合う活動を通して、根拠を明らかにして説明することができる。(思考・判断・表現)

② 本時の展開

	学習活動	◎指導上の留意点 ●評価
導入 5分	1. 本時の課題について理解する。 学習課題 アジア諸国の中で、日本はどの地域(国)と深く関わっていくべきか。	
	2. 本時の学習課題に対して、現時点での自分の考えを記述する。	◎ワークシートに自分の考えを記述させる。
展開1 10分	3. エキスパート班で発表の確認を行う。 ・ジグソー学習で伝えたい内容をエキスパート班で吟味し、ワークシートにまとめる。	◎エキスパート学習の班に分かれ、ジグソー学習で伝えたい内容を3～4個程度考え、ワークシートにまとめさせる。
展開2 20分	4. ジグソー学習を行う。 ・地域(国)についてまとめたことを、班員に伝える。 活動の注意点 ① 他者の発表は最後まで聞く。 ② 他者と自分の考えの違いに着目する。 ③ 疑問点があれば積極的に質問する。 ・Jamboardを使って発表し、班内で意見交換を行う。 ・学習課題に対して班としての意見を考え、まとめる。	◎違う視点をもった人とのやり取りを通して、学習課題について自分の考えを持つことができるように活動を促す。 ◎Jamboardの付箋の機能を使って発表させ、班としての1つの意見を、根拠と共にまとめさせる。 ●日本が関係を深めていくべき地域(国)について、話し合い活動を通して、根拠を明らかにして説明できる。(思考・判断・表現)
展開3 10分	5. クロストークを行う。 ・学習課題に対する答えを学級全体で発表する。 ・他の考えを聞き、自分の考えに対する理解を深める。	◎学級全体で班の意見を確認しつつ、教師側から各班に質問をしたりして、活発な交流となるようにする。
まとめ 10分	6. 個人思考を行う。 ・ジグソー学習、クロストークを踏まえ、学習課題に対する自分の考えを表現する。 7. 本時の振り返り。	●本時では、次時にどの地域(国)について自分の考えを記述するかを決めさせる。 ●日本が関係を深めていくべき地域(国)について、話し合い活動を通して、根拠を明らかにして説明できる。(思考・判断・表現)

③ 本時の評価(評価基準)

- A：複数の根拠を示しながら、日本が関係を深めていくべき地域(国)について、他の地域と比較しながら表現している。
B：複数の根拠を示しながら、日本が関係を深めていくべき地域(国)について表現している。
C：B評価に満たないもの。

5 実践を振り返って

生徒は、単元の2次の1時間目において、エキスパート学習の班で調査活動を行い、説明の準備をしてきたため、本時においては、ほぼ全員が自分の調査した地域(国)の経済発展の様子や日本との関わりについて、他の生徒に発表することができた。単元の1次における学習で扱った資料を再考し、そこから新たにわかったことを伝えたり、1次の各地域の学習で扱わなかった内容を独自に調べ、それを発表したりする生徒が数多くいた。また、発表を聞くだけでなく発表内容についてももう少し聞きたいことを質問したりするなど、活発に意見交流を行っている班がほとんどであった。

生徒は調査した地域(国)について、図3のように、他の生徒に伝えたいことをGoogle Jamboardの付箋の機能を利用して記入し、記入したものをシート上に貼って意見交流を行った。図3は、班活動において良くまとめられていたものを示している。この班は、タブレットの使い方をよくわかっている生徒が中心となり、付箋の記入の仕方や、まとめ

方・レイアウトなどを他の生徒と相談し、工夫しながらまとめていた。Google Jamboardを使うことで、班活動などで用いられる普通のホワイトボードのように、参加者全員が同じ画面を共有しながらリアルタイムで書き込めるため、お互いの持つ意見を瞬時に把握することができ、活発な意見交流や対話のある学習活動を展開することができた。しかし、全体ではGoogle Jamboardの操作に不慣れな生徒が多く、自分の意見を打ち込む作業に思ったよりも時間がかかっていた。出された意見を吟味しながら話し合いを行い、班としての結論を出すのに時間がかかってしまったため、学級全体でのクロストークの時間を十分に確保することができなかった。そのような中でも、生徒は限られた時間の中でそれぞれが出した意見をグルーピングし、他の地域（国）に関する意見と比較しながら、課題の解決に向けて取り組んでいた。

単元の学習を行う前に行ったアンケートでは、アジア州のイメージについて、中国や韓国など、日本から距離的に近い国を挙げ、その国に対するイメージを記述している生徒が多かった。アジア州に対するイメージの偏りが存在していたが、本時の班活動の結論として導き出した地域（国）は、東アジア（中国）を挙げた班が2つ、東南アジア（タイ）を挙げた班が1つ、南アジア（インド）を挙げた班が1つ、西アジア（サウジアラビア）を挙げた班が2つあった。東アジア（中国）を挙げた2つの班のうち、1つ目の班は日本と中国との貿易関係に着目し、両国が関わりをさらに深めていくことで両国の貿易関係がより活発になっていくだろうということ、東アジア（中国）を選んだ根拠としていた。2つ目の班は、日本の工業と中国の労働者との関係に着目し、他地域と比べて中国の人件費は比較的高くなってきているが、中国に日本の企業の工場を作り、工業を通じた関わりを深めていくことで、日本と中国の両国にとってメリットがあるのではないかということ、東アジア（中国）を選んだ根拠としていた。東南アジア（タイ）を挙げた班は、タイの経済成長率と人件費の安さ、日本とタイの文化的な交流が盛んであるということに着目し、元々交流が盛んであったタイに日本の企業の工場を作ることによって安価な労働力をさらに活用することができ、日本の工業のさらなる発展につながるということ、東南アジア（タイ）を選んだ根拠としていた。南アジア（インド）と挙げた班は、世界第1位に迫る人口、情報通信技術の中核に据えた急激な経済成長、10年後には日本を抜いて世界第3位の経済大国になる可能性があるという情報から、日本がインドと深く関わりを持てば、日本にとって何かしらのメリットがあるのではないかということ、南アジア（インド）を選んだ根拠としていた。西アジア（サウジアラビア）を挙げた2つの班は、いずれも西アジアからの原油が日本の資源やエネルギー、日本の生活を支えているということに着目し、日本が今後も発展を続けていくためにはこの地域（国）との関わりが重要であるということ、日本が今後とも発展を続けるのではないかと、教科書や資料集には掲載されていない内容を根拠にしていた。このようにして、単元の1次を通して学習したことや、本時の前に行った調査活動で得た情報などから、アジアの各地域（国）には日本にはない特徴があったり、その地域（国）と深く関わることで日本が得られる利点があったりするということを理解できている、この深い学びが、各班の結論において、偏りの少ない多様な結論を導き出すことにつながったのではないかと考える。

6 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

事後アンケートでは、「授業を通して、アジア州の特色や経済発展の様子についてイメージが持てましたか」という質問に回答してもらった。回答の中から、事前に抽出していた3名の生徒の意見について、単元の学習前のアジア州に対するイメージと学習後のまとめの記述を比較してみた。

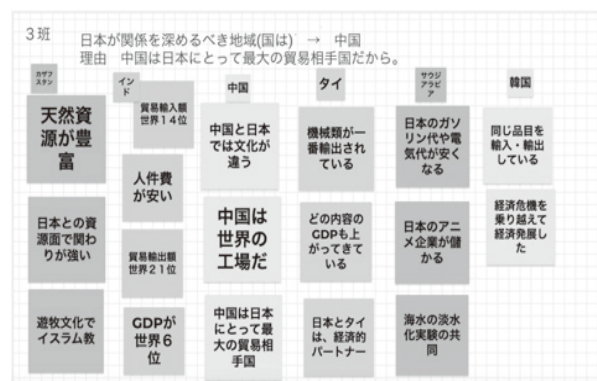


図3 Google Jamboardを使ったまとめ

	アジア州についてのイメージ (単元の学習前)	アジア州の経済発展について考えたこと (単元の学習後)
生徒A	中国やインドなど、人口が多い国があるところ。	アジア州の学習を通して、中国やインドでは人口が多いということを生かして工業化をしたり、経済発展を進めたりしてきたということがわかった。
生徒B	経済の発展について、良い地域と悪い地域の差がありそう。	同じアジア州の国でも、資源が取れることや人口や他の国との関わり方が違うと、国の様子や経済の様子が全然違うことがわかった。
生徒C	中国が経済的にすごく発展していると思う。	今までは中国がアジアでトップという感じてしたが、アジアには、経済発展をしている国がいくつもあり、みんなそれぞれ発展してきているし、今後は中国を上回る経済発展をする国が出てきてもおかしくないと思いました。

上記の記述のように、いずれの生徒においても最初に持っていたアジア州に対するイメージに変化が見られた。生徒Aのように、「アジア州と経済発展」という内容について、ほとんどイメージを持つことができなかった生徒が、単元の学習を通して新しい知識や概念を獲得して行く中で、単元の終わりには自分なりの言葉で「アジア州と経済発展」という内容についてまとめることができた。感想程度の記述にとどまる生徒もいたが、多くの生徒が単元の学習を終えて考えを深めることができたようであった。また、本時の授業についての自由記述では以下のような意見があった。

- ・ 班の友達との意見交流で、自分がその国についてよく知らなかったことなどを、友達の意見を聞いて知ることができました。
- ・ ジグソー学習がとても面白かった。いつもの班の人とは違う人と班を作ると、その国のことを自分自身がきちんと理解しなくてはいけなくなるから、いつもよりもじっくりと資料を見て調べることができた。
- ・ 自分が調べてきたことをいつもの班で上手に伝えることができるように、伝え方を工夫することができた。自分の班の中では意見交換がたくさんできたけど、もっと他の班の考えを見ることができたらよかった。

上記の記述のように、単元を貫くパフォーマンス課題を設定し、単元の終末にその課題に対する答えを個人で考える機会を設定したことで、ジグソー学習が単に自分の調べたことを発表し合うだけの活動にとどまらず、互いの発表を参考にしながら、自らの意見を持つための活動にもなった。適切な課題設定と主体的・対話的な学びの要素を含んだ学習活動を組み合わせることで、生徒の学習に対する意欲、思考力や判断力を高めることにつながったと考える。

また、事後アンケートの質問への肯定的評価は、「グループ活動で自分の考えや集めた情報を仲間に伝えることができましたか」87.1%、「仲間との意見交流を通して、新たな発見があったり、自分の考えが深まったりしましたか」100%、「グラフやデータなど、諸資料の読み取りや活用を仲間と協力しながらできましたか」80.9%と、全て80%以上を占め、本研究の成果は概ね達成できたと言える。

(2) 今後の課題

本研究においては、自分の意見を持つことができても、発表に対して苦手意識を持っている生徒に対して、効果的な支援ができなかったことが課題である。個々の活動の様子をもう少し注意深く観察し、一人ひとりへの支援の方法を充実させる必要があった。このような言語活動のスキルは短期間で向上するものではないため、今後も、意見交流や対話のある学習活動を計画的に単元の中に取り入れていくことで、生徒のスキルを高め、より充実した学習活動を行ってきたい。そして、今回の実践のように、生徒が明確な根拠や理由と共に自分の意見を持ち、その意見を活発に交流することができる学習活動を積極的に授業に取り入れていくことを自分自身の研究課題として追求していきたい。

【参考文献等】

- ・ 教育環境デザイン研究所「知識構成型ジグソー法」<https://ni-coref.or.jp/archives/5515> (2022年6月1日閲覧)
- ・ 『文部科学省中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』, 東洋館出版社, 2018年
- ・ 中野英水編『パフォーマンス課題を位置づけた中学校地理の授業プラン&ワークシート』, 明治図書, 2021年
- ・ 西岡加名恵・石井英真『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価「見方・考え方」をどう育てるか』, 日本標準, 2019年
- ・ 三藤あさみ・西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むかー中学校社会科のカリキュラムと授業づくり』, 日本標準, 2010年